

昭和二十一年四月に中国名で「シユコー」と言う所から日本の貨物船で出航しました。乗組員も日本人でした一週間位で横須賀港に到着して上陸し、駅から汽車に乗り懐かしい我が家に無事復員することができました。

復員してからは食糧増産のために農業に専念して、昭和二十二年に結婚し、娘と息子も二人生まれました。しかし昭和三十三年に妻が病に冒されて先立ちましたので、その後現在の妻と再婚して農業を継続しておりました。今では高齢になりその作業も大変になり、サクランボとリンゴなど果樹園のみにして、田圃は全部小作に出しました。子供たちはそれぞれに家庭を持つて独立しており、長男が近くに新居を構えておりますので、孫や曾孫が時々遊びに来て顔を見せてくれますので、充実した余生を妻と共に楽しんでおります。

合わせ並べて、その上から染める仕事です。この仕事を兵隊にゆくまで続けていました。

徴兵検査の結果は第二乙種合格でしたので仕事を続けていました。当時は戦時色が日ごとに強くなりつつありました。いい若者が兵隊に取られないのは肩身の狭い思いをさせられる時代でもありました。

昭和十八（一九四三）年一月七日、待ちに待った赤紙が来ました。これでやっと一人前の顔ができる喜びました。早速、松本の捺染業の主人に話しました。主人も「それはよかったです。お国のためにしっかりと働いてきなさい」と餞別をくれました。

お店の皆さんに挨拶して、故郷の塩尻に飛んで帰りました。両親は頼りになる長男がいなくなる淋しさはかくせませんでした。当時の世相として女々しいことは言えません。入隊までわずかに一週間しかありません。親戚、隣近所への挨拶回りに走り回っているうちに、一月十五日の入隊日が

湖南省の警備隊にて

長野県 上原保雄

私は大正十一（一九二二）年十一月十二日、長野県東築摩郡塩尻町下大門五五番地で父上原章蔵、母なみよの長男として生まれました。弟は一人、妹二人の六人家族でした。家業は染物屋でした。私は小学校を卒業したらすぐ丁稚奉公に出ました。東京で菓子屋に奉公しましたがわずか一年でやめました。

長野から東京に出るといのは、当時としては珍しく、遠い所へ行くんだという気持ちが強くて、独りでいるのが我慢できなかったのだと思います。どこへ行っても働くのも我慢する気がなければ駄目だ、と親にこんこんと諭されて、今度は同じ県内の松本市の捺染業で十人位いの職人を抱える所に働きに行きました。捺染といのは長さ七メートル位の板の上に布地を貼り付け、その上に型紙を

きました。同じ日に入隊する近所の若者が五人いました。

今までの入営風景は幟に「祝入営」の文字が染め抜かれ、名前も入っていました。戦局が厳しくなったためか幟は無く、親戚と隣組の人達だけが日の丸の小旗を手に塩尻駅まで見送ってくれました。五人の若者の代表が「お国のために働いてきます。生きて帰るつもりはありません」と悲壮な決意を挨拶して、一路入隊先の松本第五十連隊に向けて出発しました。

入隊先の松本はつい二週間前には働いていた所なので少しも不安はありませんでした。松本第五十連隊の営門を入り、国家の干城としての自覚に身が引きしまりました。

連隊の第十中隊に配属され、家から着てきた衣服を全部自宅に送り返し、軍衣袴に着替えると帝國軍人の形が整いました。二日間は班長や初年兵係の人が親切丁寧にいろいろ教えてくれました。しかし三日目になると昨日までの親が一転して鬼

になりました。起床から就寝まで目の回るような忙しさにびつくりしました。

三步以上は「駆け足」、上級者（どっち向いても皆上級者）には敬礼しなければなりません。初年兵はどこを向いても上級者ばかりですから敬礼の手が上りっぱなしです。

入隊して三カ月間は一期の検閲を受けるための猛訓練の連続で、息をつくひまが無いとはこれというのでしょうか。気の弱い兵隊は猛訓練に加えて内務班での古年兵によるビンタで気が変になり、便所で首を吊る者が出る始末でした。自殺する兵隊の上官は罰を加えられるのが常識ですが、時局が悪化していたためか大した問題にならず「意気地なしが自殺した」位いの感覚で処理されたようでした。

三カ月の猛訓練がようやく終わった頃、私達は中支派遣となりました。中支のどこか分かりません。

とにかく武装しろといわれ、三八式歩兵隊と弾

も精鋭部隊で、なかなか手強い敵といわれていました。行本大隊で九カ月すごした昭和十九年三月に、私の中隊（藤井中尉隊長）だけが転属になりました。

転属先は湖南省石城湾に駐屯する支那派遣軍第六方面軍、独立歩兵第十二旅団（善）、旅団長安永篤次郎陸軍少将のT大隊であります。二カ月間、歩いたり車に乗ったりしてようやく大隊に着きました。

旅団司令部は威寧に在り、大隊本部は通城に在り、中隊は石城湾に駐屯していました。T大隊長は素行極めて悪く、現地女性を伴いて部下の「響（ひびく）を意に止めず、誠に嘆かわしい少佐でありました。

私は行軍中、銃を肩にした姿勢が悪いからと乗馬している大隊長に鞭で叩かれたことがあります。行軍で疲れ果てた兵隊を労わる気持ちがなく無い、非情な少佐だと思いました。

昭和二十年春頃になると、南方戦線の敗勢がど

盒を前二個、後一個、計三個ついた革帯と手榴弾一個に鉄かぶとに背のう（リュック式）雑のうを着け一人前の兵隊姿になりました。

昭和十八年五月二日、広島へ向け軍用列車で松本を出発、広島で軍用船に乗船しました。見習士官二人が指揮官でした。巡洋艦二隻が海上護衛をしてくれました。朝鮮の釜山に上陸、一路北支に向け満州を通過、天津近郊に駐在する独立混成旅団長谷目大隊に到着したのが六月三十日でした。約一カ月の行程でした。そして第十二中隊に配属されました。

現地の愛国婦人会の人達の歓迎を受けました。部隊は歩兵隊で早速、警備の任務を与えられ、三八式歩兵銃に実弾を込め歩哨に立ちました。

それから十日後、東海地区の行本（ゆきもと）大隊の第四中隊に移りました。その古年兵は東北弁の人達でした。我々初年兵にも親切にしてくれましたので非常に嬉しかったです。警備が任務の部隊で、敵は新四軍といって共産八路军軍に中

こからとなく兵隊の間に広がりはじめました。昭和二十年八月十五日敗戦となり、大隊本部の在る通城で武装解除となり銃剣、鉄兜、手榴弾、弾薬等の武装が無くなり、身が軽くなり、楽になりました。

蒋介石軍の高官が来た時は部隊全員が整列して最敬礼をしました。私は分哨勤務でしたが敗戦でその必要もなくなりました。帰国のため、上海に集結することになりました。上海に到着するのが遅くなったので、戦犯か何かで収容所入りだったのでろうと皆さんから聞かれますが、実際に漢口近くから歩いたりして上海まで来るのがとても大変でした。先づ食糧が全く無いのです。終戦から約一年十カ月の間、米は全く食べていません。口に入るものは何んでも食べなければ命が無くなるのですから必死でした。現地の人家の用事をしたり、仕事をして食べ物を貰ったり、食事をよばれたりしましたが、大工仕事が出来る兵隊は特別待遇されたようです。

上海までくる途中は、夜寝る時は野外で藁を敷いて寝ました。野外で寝るのは当り前でした。ようやく上海にたどり着きましたが復員船が少なく順番待ちで大変でした。ようやく乗船出来た時は本当に助かった。これでようやく日本に帰れる。家に帰れるのだと嬉しかったです。博多に上陸、懐かしき祖国の土を踏みました。私らは家に帰ったのは驚くなかれ昭和二十二年六月二十日です。

二十四歳で日本に帰りましたが、栄養失調で働くことができず入院を勧められましたが、金が無くて入院できませんでしたので自宅で寝ていました。

肺と肋膜炎をやられ、熱があつて三年間自宅療養しました。そのうち少しづつ良くなりました。染色職人として就職もでき、現在は胸の検査をしても「異状なし」になりました。

私の部隊は松本―広島―釜山―中支―湖南省・養老洞―石城湾―桂口市―通城にて終戦、武装解除―上海―博多―自宅と歩いたことになりました。